

兵庫県下のギフチョウについて¹⁾

山 本 広 一

ギフチョウ (*Luehdorfia japonica* LEECH, 1889) は、わが国特有の蝶である。中国・近畿の地方には低山地から山地にかけて産地が多く、中部地方では中央の山岳地帯以外の平地または低山地に生息する。分布はこれよりさらに日本海側を北上して秋田県の南部に達し、太平洋側では関東西部の山地にまで広がって、東京都高尾山付近がその東限とみなされている²⁾。

この蝶は明治以前よりダンダラチョウと呼ばれ、古くは吉田雀巢庵の写生図にもあるという。それが現在のギフチョウと改められたのは、1883年4月24日、名和靖氏が岐阜県郡長郡祖師野村で採集して以来、産地は岐阜県下に限られ³⁾、あたかも岐阜特有の蝶であるかのように思えたからである。1902年、名和氏は当時までの採集状況を説明し“世人よりは岐阜蝶の邦称を命ぜられぬ”と述べている。ところが、1889年、東海道線山北停車場近く〔神奈川県足柄上郡〕で1頭が捕えられ(11—Ⅳ, 1889)、ついで長野⁴⁾・山口(1891)、三重・鳥取・奈良(1893)県下からも見つかった。しかし、獲られた個体数は少なく、国内はもとより、国外からも大きな関心を寄せられていた。

また、名和氏はその食草を知るために、1887年、懸賞採集をも試みた。そして、それがウスバサイシンであることを突きとめたのは、後日第二代の所長として迎えられた名和梅吉氏であった。

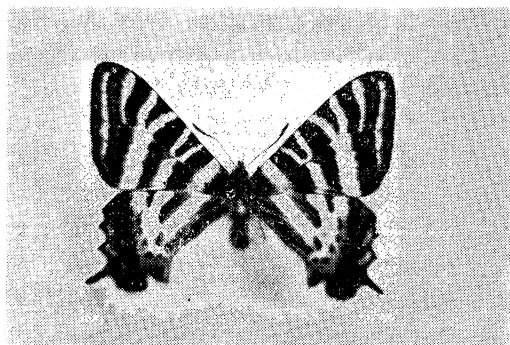
× × × ×

筆者は兵庫県下のギフチョウについて、発生地の現状や習性的一端、その他を瞥見し、減少しつつある要因などを考察したいと思う。

1. 兵庫県下での採集記録とその分布

ギフチョウが初めて本県に知られたのは1925年のことである。昆虫世界第29巻 p.215, 1925に“兵庫県武庫郡六甲村高羽の小林賢三氏からの報告に拠れば、本年四月廿日に六甲山麓赤松城熊笹中に於て採集された……”と

記されている。その後、小林賢三〔桂助〕氏は関西昆虫学会々報 (1), 1930に“商大の辺より一王山の辺りにかけて1日15~16頭の採集は困難でない”と報告し、現在の神戸市灘区六甲台町から一王山町十善寺付近にかなりの個体が発生することを明らかにした。戸沢信義氏によると、東六甲や摩耶山麓にもいたという。ここに掲げた標本は1931年4月15日小林氏の採集になる六甲山麓産である(第1図)。



(第1図) 神戸市六甲山麓産
♂, 15—Ⅳ, 1931, 小林桂助氏採集
筆者所蔵

ところが、1928年4月13日、筆者もまたこの蝶が加東郡滝野町五峯山、通称光明寺山(230m)に産することを認め、翌14日、山頂の大悲院付近で3♂, 1♀を採集した(14—Ⅳ, 1928)。筆者はその後もたびたび五峯山へと出かけたが、見かける蝶は数が少なく、食草も豊かでない。絶滅する懸念があるので、採集しても毎年3~4頭の程度にとどめ、この地に産することは1949年まで公表を避けていた。そのため、発生地を濫りに荒されることがなく、蝶は今も昔ながらの余命を保っている。

筆者は1929年以来さらに新しい産地を見つけるために努力した。そして、この年滝野町上滝野の鬮竜灘付近で1♂を捕らえ、同町下滝野の麦畠で1♂を獲た(13—Ⅳ,

1) 兵庫県蝶類誌 (3)

2) 1893年、福島県からも報告されたが、これはヒメギフチョウと解釈すべきものである。その後2, 3の記録がないではないが、ここでは白水隆:原色図鑑日本の蝶, p.71, 1965によることとした。

3) その後、池田郡霞間ヶ谷;大野郡深坂村,同長瀬村;揖斐郡谷汲村(以上1885年);岐阜市金華山;方県郡御望村からも獲られたが、1887年まではすべて岐阜県下に限られていた。

4) 長野県下にはギフチョウとヒメギフチョウとが生息する。しかし、古くは同一種と思われたため、何れもがギフチョウとして記録されている。

この蝶の日射しに対する鋭感さはまったく驚くほかはない。たとえ晴れてはいても、浮雲が太陽を遮ぎると、忽ち蝶はいなくなる。あるときは、近くの松の葉末に潜んでいたことがあり、その姿は驟雨を避けた旅人の雨宿りに似た感がする。

そのため、蝶を採るには天候ばかりでなく、採集地の地形をも考慮する要がある。早くから木影のできる所では、太陽が高くても来なくなり、五峯山頂では正午まで、雌崗山頂でも午後2時半頃が採集の限度となっている。

しかし、山頂や尾根路で獲られるものは、ほとんどが♂であり、♀を採るには山麓がよい。こうした所では、しばしば交尾中や産卵中の♀に出会うことがある。

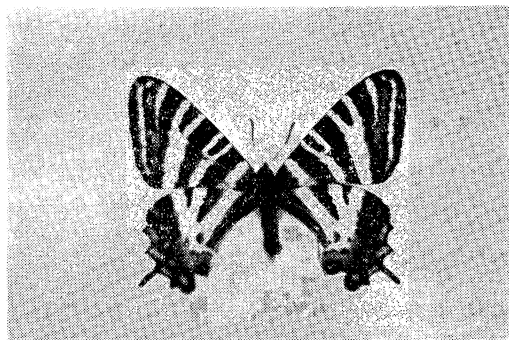
この蝶の発生する最盛期は桜の開花期と一致する。しかし、3月末から4月初旬は気温に狂いが大きく、年によってはいちじるしく違うので一概には断言できないが、最近いくぶん早まってきたのでないかとも思われる。筆者が加東郡滝野町と小野市下来住町での経験では、従来4月12~13日頃が採集の好季であった。それが最近この頃に獲たものは完全な標本となりにくく、今少し早目に訪れる要がある。1957年には3月31日に、1959年には3月30日に、1961年には4月3日に採集し、1966年には飼育中のものが3月23~26日に羽化してきた(但し室内である)。

もっとも、裏日本での発生はやや遅く、5月に入っても完全な♂が獲られている。

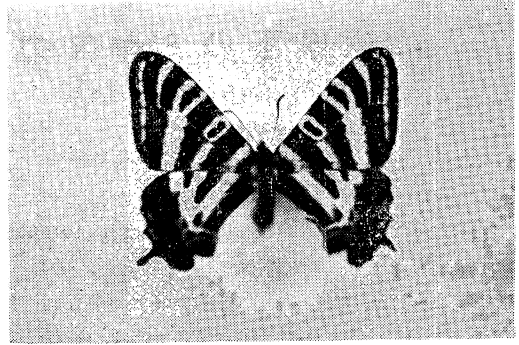
4. 成虫における斑紋の変化と畸型

翅の斑紋は比較的安定し、本県産からは特別な異常型が知られない。しかし、前翅中室部の黒色帯が短くなり、地色の黄色がこれを環状につつんだ、いわゆる forma omikron Врук, 1932 と同定される個体(第6図)は筆者の標本中にいくつかある。この黒色帯について筆者の所蔵する小野市産72頭を調べたところ、

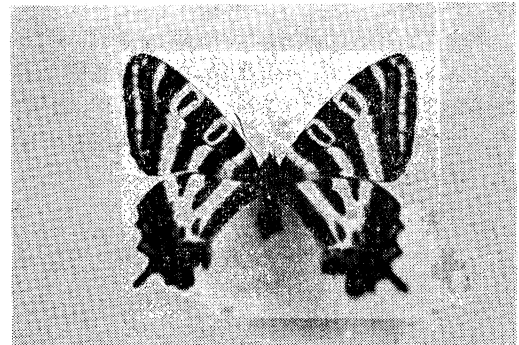
- 1) 中室内の黒帯が中室の後を区切る翅脈から離れたため、U字状につつまれたもの(第4図)……………18%



(第4図) 小野市下来住町産
♂, 22-IV, 1965, 筆者採集・所蔵



(第5図) 小野市下来住町産
♂, 5-IV, 1961, 筆者採集・所蔵



(第6図) 小野市下来住町産
♀, 22-IV, 1961, 筆者採集・所蔵

- 2) 中室内(または中室端)の黒帯が前縁にまで届かず逆U字状となったもの……………4%
- 3) 中室内の黒帯だけが環状につつまれたもの(第5図)……………15%
- 4) 中室内の黒帯が中室端の黒帯とともに環状につつまれたもの(第6図)……………7%
- 5) 中室端の黒帯だけが環状につつまれたもの……………5%
- となり、黒色帯の大きさや黄色環の形には連続的な変化が認められる。しかも異常の発生度は高く、全体の半ばにもおよんでいる。こうした変化は神戸市雌崗山産や西脇市武島山産にも見られる。しかし、それが単なる個体的変化であるかどうかは明らかでない。白水隆氏の教示によると、一連の連続的な変化と思われるが、遺伝的なものが含まれている可能性が強いとされ、本質的な解明は累代飼育による遺伝的な研究に俟つほかはない。

畸型については、堀田久氏による武田尾産の1♂(2-IV, 1959)が報告されている。これは右後翅だけが表裏とも淡色化したものである。

本種については、さらに詳記したい事がらや、調査を要するものも少なくないが、それらは他日稿を改めることとし、ひとまずこの項を終えることとした。

(以下p. 232へ)

(以下 p. 247より)

ここに、ご懇切なご教示を賜った奥谷禎一・白水隆両先生に対し、また、貴重な標本や資料をご提供下さった堀田久・猪股涼一・小林桂助・蔵本博美・森脇千代蔵・永井壮一郎・小川進・大倉正文・高橋匡・戸沢信義・辻啓介・若井博史・山本茂信各氏に厚くお礼を申し上げます。

文 献

- 芦田 実・山本一裕 (1957), ギフチョウとその飼育, 科学の芽生(西宮市立大社中学校理科部)(2): 12—20
早川徳道 (1953), 武田尾採集記, MDK News (27): 3
日浦勇・柿原滋・溝口修 (1958), 武田尾のギフチョウの卵塊, おおさか虫の国 1(3): 6
堀田 久 (1959), ギフチョウの畸型, MDK News (53): 9
——— (1965), ぎふちょう, 視聴覚教育資料(西宮市立教育研究所), 理 No. 4
猪股涼一・岡本清 (1960), 多可・西脇地方の昆虫(蝶類), 兵庫生物 4(1): 24—28
——— (1962), 多可・西脇地方の蝶類(追報), 兵庫生物 4(3/4): 177—178
岩村 巖・中谷貴寿 (1961), 西播の蝶分布資料(1), 兵庫生物 4(2): 135—136
加地早苗 (1940), 最近の六甲連山の蝶類目録, 昆虫界 8(77): 442—452
[小林賢三] (1925), 六甲山麓にギフテフ, 昆虫世界 29(6): 215
小林賢三 (1930), 六甲山の蝶相, 関西昆虫学会々報(1): 69—73
倉田 稔 (1964), ギフチョウとヒメギフチョウの生活, ギフチョウとヒメギフチョウ(信濃教育会出版部): 64—85
溝口 修・日浦勇・溝口重夫 (1959), ギフチョウ属の研究(4), 昆虫科学(昆虫研)(10): 6—8
溝口 修・溝口重夫・日浦 勇 (1960), 同上(5), 昆虫科学(11): 8—12
村上雅昭 (1959), 蘇武・瀬川・妙見の昆虫, Natura (県立柏原高等学校生物研究会)(16): 48—50
中尾淳三 (1959), 氷の山付近の蝶相, Natura, (16): 15—23
中谷貴寿 (1959), 加古川市の蝶類(第2報), MDK News(52): 10—13
南波正郷 (1962), ギフチョウの飼育, 科学の芽生(7): 28—30
名和靖 (1902), 岐阜蝶の分布を記す, 昆虫世界 6(61): 351—356
延原 肇 (1936), 兵庫県三木町付近の蝶, Insecta 1(1): 13
越智研一郎他 (1952), 今年の新しい蝶, Natura(8): 54—60
坂本[昌則] (1958), ぎふちょうの飼育, 生物(県立鳳鳴高等学校生物部)(9): 3—7
白水 隆 (1958), 日本産蝶類分布表(北隆館)
田中 蕃 (1953), 採集期をひかえて武田尾あんない, MDK News(26): 8
八木典也 (1960), 相生市付近の蝶類一覽(自刊) 8p.
山田舜亮 (1934), ギフテフの採集, Zephyrus 5(4): 335
山本広一 (1949), 加東郡下のギフチョウについて, Viola(兵庫生物学会小野支部報) 1(2): 7—9
——— (1951), 県下に於ける蝶類の採集地について(1), 兵庫生物 1(5): 91—93
——— (1953), 神戸市雄崗・雌崗の両山にギフチョウを捕う, MDK News(27): 11
——— (1954), 東播地方のギフチョウ, MDK News (30): 2—3
——— (1966), 移りゆく兵庫の蝶, 兵庫の自然(六月社版): 32—33
———・吉阪道雄 (1958), 兵庫県産蝶類目録(1), 兵庫生物 3(4): 228—236
山本義丸 (1958), 兵庫県氷上郡昆虫目録(県立柏原高等学校生物教室)
山下 昌 (1958), 成松・葛野地区に於ける蝶の分布, Natura(15): 84—86